ISSN 2759-0542

京都外国語大学
ラテンアメリカ研究センター
紀要 2025

‹論文›

テワンテペック地峡部におけるメシーカの進出と領域編成
…… 小林致広 1

ブラジル北東部文学と抵抗する女性像
— グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』から —
…… 岐部雅之 23

‹研究ノート›

戦前日本におけるモンロー主義をめぐる米州関係に関する文献の紹介
— モンロー主義から米州主義へ —
…… 辻豊治 43

中米地域におけるコミュニティ・ミュージアムと博物館政策に関する研究
— ニカラグアとコスタリカの比較を通じて —
…… 杉岡明日香 59

‹調査研究報告›

Daños al Patrimonio Arqueológico y su Tratamiento Sancionador:
análisis del DS N°005-2019-MC
…… 大谷博則、ホセアントニオ・オノフレ・マイタ 77

‹書評›

A・G・ホプキンズ著(管英輝・森丈夫・中嶋啓雄・上英明 訳)
『アメリカ帝国—グローバル・ヒストリー』
…… 牛島万 101

Vol. 25

〈論　　文〉

ブラジル北東部文学と抵抗する女性像
――グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』から――

岐　部　雅　之*

キーワード

グラシリアノ・ハーモス、サンベルナルド、北東部文学、行為（パフォーマンス）、女性像

Resumo

O presente trabalho tem como objetivo analisar a imagem feminina no romance nordestino *São Bernardo* (1934), de Graciliano Ramos (1892-1953). Na obra, narrada na primeira pessoa por Paulo Honório, pragmático e fazendeiro arrivista vindo das camadas populares, o eixo central é a relação conflituosa com Madalena, esposa culta e humanista, que se suicida após não conseguir resistir à opressão do marido. Portanto, o relacionamento deles reflete a estrutura patriarcal do Nordeste brasileiro no início do século XX em que a mulher não tinha voz própria por causa da dominação pelos coronéis. Apesar da decisão trágica de Madalena, sua representação pode ser considerada como precursora feminista porque não obedeceu às ordens da sociedade da época, mostrando sempre seu ideal.

Assim, no capítulo I deste artigo, pretende-se compreender a figura de Paulo Honório, levando em conta o contexto histórico da narrativa. No capítulo II, examina-se a posição da mulher na sociedade patriarcal por meio de três personagens femininas: velha Margarida, dona Glória e Madalena. Por fim, no capítulo III, procura-se a interpretação teórica das ações de Madalena à luz do conceito de perfomatividade de Judith Butler, tentando situar a figura da mulher resistente na literatura nordestina do Brasil.

はじめに

20 世紀初頭のブラジル文学は、リオデジャネイロやサンパウロなどの南東部を中心にヨーロッパから前衛芸術の成果を咀嚼しながら、急速に近代化する都市の中でブラジルらしさを模索した。これに対して、1920 年代末から 1930 年代に興隆した北東部文学は、暴力や抑圧、貧困、経済格差などの社会的矛盾に目を向け、冷徹な見方を通じて懊悩する人間の心を生々しく描き出した。ヨーロッパの模倣から抜け出して国内の現実に向き合った点で両者は共通するものの、北東部文学においては社会批判的リアリズムの傾向が色濃く、飾らない率直な言葉遣いでブラジルの抱え

＊　京都外国語大学

る問題を活写したのである。

その中の一人で、ブラジル文学最高峰の作家マシャード・ジ・アシス（Machado de Assis: 1839-1908）の後継者的存在と言えるグラシリアノ・ハーモス[1]（Graciliano Ramos: 1892-1953）は、人間の葛藤を鋭く観察し、推敲を幾度も重ねた簡素な文体で物語を綴った。文学批評家のステガニョ＝ピッキオ（Stegagno-Picchio）は、物語の構成や語彙の選択等においてマシャード的であることを踏まえ、グラシリアノ・ハーモスの作品が余計なものをそぎ落とし、素朴で洗練されていると評価している（Stegagno-Picchio 2004: 531）。さらに、本稿で取り上げる小説『サンベルナルド（*São Bernardo*）』（1934 年）を執筆中、妻エロイーザ・ハーモス（Heloísa Ramos）宛てに送った手紙（1932 年 11 月 1 日付け）には、グラシリアノのこだわりも見て取れる。

> 『サンベルナルド』は書き上げたものの、君も見たとおり、ほぼ全面的にポルトガル語で書かれたものだ。今はブラジル語に置き換えつつあるけれども、それが一筋縄ではいかないブラジル語で、都会の連中の書物に出てくるものとはまるきり違う。言うなれば、田舎者のブラジル語。これまで知られていなかった表現に満ちて、自分でさえ存在するとは思わなかった美しさだ。（Ramos 1982: 134-135）

『乾いた人びと（*Vidas secas*）』[2]（1938 年）と並ぶグラシリアノ・ハーモスの代表作『サンベルナルド』は、語り手パウロ・オノーリオ（Paulo Honório）が 50 歳を迎えて自身の半生を振り返る内省的な一人称の独白形式を採っている。そしてこの物語の中心にあるのが、貧困層からの成り上がりで小説と同名の農園を手に入れるパウロ・オノーリオと妻マダレーナ（Madalena）の人間関係である。目的達成のために手段を選ばない実用主義的なオノーリオに対して、貧しいながらも師範学校を出た教育者で慈悲深い性格のマダレーナは、夫の度重なる暴力的言動に耐えられず、最後は自ら命を絶ってしまう。

『サンベルナルド』の時代背景である 1920 年前後から 1930 年代にかけてのブラジル北東部では、政治的権力の強いコロネル（地方有力者）が家父長制社会の中で絶対的地位を享受するため、女性は発言権を奪われた従順な役割に甘んじざるを得なかった。抑圧的な立場に置かれながらも、マダレーナが社会主義的な理想を持って当時のジェンダー規範に逆らったことは「1960 年から 70 年代の政治活動家や遊撃隊員らの先駆者と見なし得る」（Dacanal 2018: 30）との指摘もある。これは家庭の内外で性役割を区分するイデオロギーを問い直そうとした第二派フェミニズムを示唆すると思われるが、1953 年に死去した作者グラシリアノ・ハーモスがフェミニズム運動によってジェンダー平等の闘争をマダレーナに託したと解するのは論理の飛躍だろう。とはいえ、マダレーナの沈黙と抵抗は男性的言説の“正しさ”に揺らぎを与え、パウロ・オノーリオに嫉妬と葛藤を掻き立てる。そもそも、彼が半生を振り返り自伝の執筆を決意したのはマダレーナの自殺を受けてのことであるから、この物語の背景には「抵抗する女性像」としてのマダレーナの存在がある。ただし、本作品はパウロ・オノーリオによる一人称語りであるため、マダレーナに関する描写はあくまで彼のフィルターを通したものだという点には留意しなければならない。すなわち、グラシリアノ・ハーモスの小説で描かれた「最初のフェミニスト的な登場人物」（Souza 2023: 281）という見方が一部の先行研究にはあるが、マダレーナをフェミニストの先駆者的な存在とする評価には注意が必要である。

そこで本稿では、パウロ・オノーリオとマダレーナの対立軸を出発点として、20 世紀初頭のブラジル北東部における家父長制社会の不均衡なジェンダー構造を踏まえ、マダレーナの沈黙と抵抗を理論的に把握するために、政治哲学者ジュディス・バトラー（Judith Butler: 1956-）によるパフォーマティヴィティの概念を参照したい。これにより、抵抗する女性像としてのマダレーナの言動に意味の裏付けを与えることができる。さらに、『ジェンダー・トラブル（*Gender trouble*）』（1990 年）の中で、バトラーが「ジェンダーはそれ自身の内的安定性をパフォーマティヴに構築する演技である」（バトラー 2018: 133）と指摘するとおり、ジェンダーは固定的な属性ではなく、ある規範内で繰り返される行為によって作り上げられる。別の言い方をすれば、「ひそかに時をつうじて構築され、様式的な反復行為によって外的空間に設定されるアイデンティティなのである」（バトラー 2018: 247 ／傍点は原文ママ）。女性らしさや男性らしさといった社会的規範は知らず知らずのうちに反復されることにより、女性性や男性性を強固なものにしていく。しかしながら、その反復が規範を延々と維持することはない。『ジェンダー・トラブル』の訳者である竹村和子は同書の解説において次のとおり述べる。

> （※引用者注：ジェンダー等が）社会的に構築されているということは、言語によって反復されなければならないということである。言葉を換えれば、『事実性』と考えられているものは、反復するという行為（パフォーマンス）によって、パフォーマティヴ（行為遂行的）に生産されるものにすぎない。ゆえに現体制を言語によって表現するのではなく、言語によって現体制を『生産する』という、このパフォーマティヴな反復行為のなかに、現体制の強化と同時に、現体制のずらしも、必然的に胚胎されている。（バトラー 2018: 293 ／ルビは原文ママ）

パウロ・オノーリオがマダレーナとの結婚を決意したのは、彼女の生活を保証する代わりにサンベルナルド農園の繁栄を見据えた跡継ぎの確保という発想からであった。その彼が妻の教養を過小評価し、自分の気に入らない言動に対して暴言を浴びせ、狂気的な嫉妬に駆られるのは、オノーリオが従う規範が脅かされているからであろう。一方、結婚後も家庭内で家事・育児に従事するのではなく、学校という教育空間へ出ていき、農園内に暮らす貧しい労働者の生活環境に疑問を投げかけるマダレーナの人道的な態度は、男性中心社会の規範に隙間を生じさせる行為として映し出されていることが分かる。マダレーナの試みは最終的には死という悲劇を迎えるが、夫に殺される前に自殺をしたことは、従順な女性（妻）を演じるという規範を受け入れなかった証左ではないだろうか。すると、マダレーナの死は否定的なものというよりむしろ、不在の抵抗としての意味合いを帯びる。まさに既存のジェンダー秩序に対する半永久的な沈黙のパフォーマティヴィティと言える。その女性像をジェンダー批評の観点から理論的に分析することにより、規範を攪乱するマダレーナの姿を読み直す余地は十分にあるだろう。

本稿では、まず第 1 章において小説『サンベルナルド』の全体像を把握するべく、物語の時代背景を踏まえながら、パウロ・オノーリオの人物像を中心に概観する。続く第 2 章において、20 世紀初めにおける女性の立場について、オノーリオの育ての親であるマルガリーダ（Margarida）、マダレーナの伯母グローリア（Glória）、そして妻マダレーナの 3 者について考察する。最後に第 3 章において、バトラーのパフォーマティヴィティの概念を手がかりにマダレーナの言動に理論的な解釈を加え、ブラジル北東部文学において抵抗する女性像の位置づけを試みたい。

1　ブラジル北東部社会とパウロ・オノーリオ

『サンベルナルド』の冒頭で自伝の執筆に取り掛かろうするパウロ・オノーリオは第3章において、自身の名前を明かすと同時に、以下のように語る。

> まず断っておきたいのは、私の名はパウロ・オノーリオであり、体重は八十九キロ、聖ペドロの日の頃に五十歳を迎えたことだ。年齢、体重、白髪交じりの太い眉、髭に覆われたこの紅潮した面相は相応の威厳をもたらしてきた。（中略）
>
> 率直に申せば、年齢という疑いようのない数と聖ペドロの日付には儀礼的な意味合いがある。私がこれを受け入れるのも、教区の洗礼記録簿に記載されているからに過ぎない。出生証明書には代父母の名こそあるが、そこには父親も母親もない。両親には何か明かすまいとする理由があったのだろう。よって、自分の誕生日を正確に祝うことが私にはできない。（Ramos 1953: 13）[3)]

両親の名前が記載されていない出生証明書の情報から、物語世界の現在における語り手パウロ・オノーリオが50歳であると分かる。時代を特定する正確な数字は明示されないとはいえ、ブラジル国内において社会主義思想が広まりつつあったことや、「ある日、アゼヴェード・ゴンジン（Azevedo Gondim）が革命の噂話を持ってきた。南部が蜂起し、中部が蜂起し、北東部が蜂起したという」（Ramos 1953: 179）といったように、1930年革命から間もない時期であることが推察できる。要するに、パウロ・オノーリオはブラジル史でいう旧共和政時代（1889年～1930年）を生きてきた人物である。奴隷制廃止（1888年）直後の社会においても、農園経営における振舞いは奴隷主人と何ら変わらない権力者そのものであった。実際、彼がサンベルナルド農園を手に入れて経営の拡張を進める回想場面では、労働者マルシアーノ（Marciano）に教育の重要性を説くルイス・パジーリャ（Luís Padilha）を「ここはロシアじゃないんだ。分かったか？　じゃあ、失せろ」（Ramos 1953: 61）と怒鳴りつけたように、社会主義革命を意識している様子が読み取れる。ほかにも、しばらく無報酬だったパジーリャがパウロ・オノーリオに窮状を訴えた際、「無理だな、パジーリャ。ソビエトの到来を待て。赤軍の職にはありつけるだろう」（Ramos 1953: 137）と嘲笑っており、1917年のロシア革命から遠くない時期であったことも分かる。

のちに妻となるマダレーナが師範学校出身の教師をしていたのはパウロ・オノーリオにとって皮肉なことだが、そもそも彼が農園内に学校を設置するのは打算的な考えからであった。ある日、サンベルナルド農園を視察に訪れた州統領に学校はどこにあるのかと訊かれたオノーリオは、どこにもないと返事をしたあと、「学校とは！　字の読み書きの可否など、何だと言うのだ」（Ramos 1953: 44）と内心思い、州政府の役人たちが農業に無知であることに憤りを隠せない。しかしながら、農園内の施設を案内するオノーリオは「学校があれば州統領の好意を得て、私の要請に便宜を図ってもらえるのではないかとふと思った。（中略）よし！　この訪問のおかげで大きな恩恵を受けられる。資本がある。どれほど稼げるか楽しみだ」（Ramos 1953: 44-45）と本音を漏らす。そこで学校の運営を任せたのがパジーリャだったのだが、教育を推進しようとの意図は微塵もなく、オノーリオにとっては一人の労働者に仕事を当てがったに過ぎなかった。

パウロ・オノーリオは若い時分にサンベルナルド農園で働いていた経験を持つが、そのときの

農園主はサルスチアーノ・パジーリャ（Salustiano Padilha）で、ルイス・パジーリャはその息子である。過去にこき使われた恨みもあって、今では「息子を学士にするべく異常なまでに倹約生活を送った末に、一家が待望した肩書を得られぬまま胃を患い、飢え死にした」（Ramos 1953: 17）と蔑み、荒れ果てた農園と酒や賭博で身を持ち崩していたルイスを見て、サンベルナルド農園を手に入れるべく金を貸すようになる。当然ながらその行為は慈悲深さからではなく、取引を行うための伏線である。そこからのオノーリオは策士よろしく、さらなる貸付けをはじめ、農園再建のためには農業が鍵だと説き、パジーリャが逃げ出すと彼を追って借金の回収を試みる。その口調は「一時間たりとも待つ気はない。こっちが真面目に話しているのに、ふざけやがって。馬鹿な真似はするな。この件を穏便に片付けたいなら、農園に値段をつけるんだな」（Ramos 1953: 23）といったように脅しそのものだった。サンベルナルド農園を手放したくはないパジーリャと是が非でも手中に収めたいオノーリオの駆け引きは、いくらで売っていくらで買うかを巡っての緊迫感で満ちている。

> 取引の交渉は夕暮れ時にまで及んだ。手始めに、ルイス・パジーリャは八十コントを要求した。
> 「正気とは思えない。お前の親父はフィデリスに五十コントで売ろうとしていたのに、それでも高い。それがもう農園は廃れ、近所の家畜が門を壊し、あばら家ばかり。メンドンサが飲み尽くそうってのに……」
> （中略）
> その後、さりげなく三十四コントで粘ると、五十五コントになった。こちらは懐の広さを示すべく、三十五コントに。パジーリャは五十五コントから一歩も譲らなかったので、サルスチアーノが息子の学業に使った金は無駄だったなと罵声を浴びせた。しまいに、手を出すぞと脅した。彼は五十コントに下げる。
> （中略）
> 私は情けを装い、現金で支払う上に持ち家を手放すことにした。（中略）サンベルナルドに四十二コント、家に八コント。そこから半時間、言い争いを続けた末に取引は決着した。（Ramos 1953: 24-26）

さらに翌朝には、「借金、利子、家の値段を差し引き、七コント五百五十ミルヘイスを手渡した。良心の呵責など露ほどもなかった」（Ramos 1953: 26）と、サンベルナルド農園の主人となったときの心境を語る。この時点ですでに、他者を人格のある人間としてではなく、近代的な農業経営を実行するための生産の道具としか見ないパウロ・オノーリオの人間性の一端が映し出されているだろう。封建的な支配構造を維持したまま、農園の労働者を威圧的に管理するのである。

こうした封建領主的な振舞いは言葉の暴力だけに留まらず、身体的な暴力にまで及ぶ。妻マダレーナとの関係が上手く行かずに苛立ちを募らせていたとき、オノーリオはマルシアーノとパジーリャが学校の前で腰掛けて喋っている様子を目にする。家畜小屋の動物たちの餌が補充されていなかったことに腹を立て、「仕事に戻らんか、この恥知らずが！」（Ramos 1953: 109）と怒鳴りながら二人に近づく。

「偉そうにしやがって、この野郎が」

私は横面を張り倒し、地面へ叩きつけた。マルシアーノはふらふらと立ち上がって怯むと、さらに五度殴られて、その度にまた倒れ込んだ。最後の一撃で地面に倒れて藻掻いた。それからようやく立ち上がると、俯いて鼻血を袖で拭いながらよろよろと歩き去った。私はしばらく呼吸を整え、パジーリャの方へ向き直る。

「悪いのはお前だ」

「自分ですか？」

「そう、お前だ。あの恥知らずを甘やかしてばかりいる」（Ramos 1953: 109-110）

パウロ・オノーリオにとって農園内の労働者は生産の道具でしかないために、損害発生につながり得る状況は許容できない。仲間意識や信頼は一切不要であり、損得勘定をもとに恐怖心で支配する構造を維持することが不可欠なのである。サンベルナルド農園の拡張を図って近代資本主義の論理を取り入れつつも、その運用方法にはこのような旧共和政時代の道徳観念が横滑りしてしまっている。文学批評家のジョアン・ルイス・ラフェタ（João Luiz Lafetá）は、オノーリオの特徴について次のように述べる。

パウロ・オノーリオはブラジル内陸部に登場する近代性の体現者である。同時に、台頭しつつあった資本主義の複雑で矛盾を孕んだ象徴で、情のない事業家である。手段を選ばず目の前のものを支配し、果敢に変革をもたらそうとする。（Lafetá 1995: 200）

パウロ･オノーリオには殺人の容疑も掛かっている。忠実な労働者カジミーロ･ロペス（Casimiro Lopes）に指示を出して､隣人のボンスセッソ農園主メンドンサ（Mendonça）を暗殺した件である。メンドンサはオノーリオと同じコロネルとして権威を振るう政敵であり、中央政府と癒着しながら互いに地方政治の主導権争いをする関係性を持つ[4)]。日曜日に控える選挙を巡って両者が探りを入れ合っているところで、オノーリオが「そうそう。一頭のうっ.....（牛と言いかけて言葉を飲み込んだ。私に六人の選挙民しかいないことは周知の事実であった）羊を殺しましょう。一頭で十分ですよね。よし、決まりました。では、日曜日に」（Ramos 1953: 32-33）と告げるが、羊は白い顎髭をたくわえているメンドンサの外見を暗示している。しかも、欠伸をしたときには「黄色く尖った犬歯」（Ramos 1953: 32）が見えることから、メンドンサの人間性は羊の皮を被った狼のような肉食獣をも想像させる。このような動物的な比喩[5)]は、外面的な穏やかさと内面的な凶暴さの二面性を浮かび上がらせると共に、本音と建て前を狡猾に使い分ける政治的対立に潜む暴力を示唆している。オノーリオの語りによれば、メンドンサは選挙が実施された日曜日の午後にボンスセッソ農園の近くで胸元の肋骨に銃弾を受けて死んでしまう。前日の土曜日、オノーリオが選挙民のために羊を屠ったり、メンドンサとの会話の中にあった「羊を殺しましょう」と発言したりするのは、メンドンサへの一種の殺害予告であり、暗殺を匂わせるものだろう。

この件について、パウロ・オノーリオにはアリバイがある。

犯行時、私は町に滞在し、サンベルナルドに建てる教会について神父と話をしていた。将来的に計画が順調に進んだ場合の話である。

「これは酷い」事件が報じられるや、シルヴェストレ神父が叫んだ。「メンドンサに遺恨を抱く者でもいましたか？」

「いやはや、そこら中に。ダニ同然の怨敵たちが。シルヴェストレ神父、話を続けましょう。鐘はおいくら程になるでしょうか」（Ramos 1953: 36）

教会で神父と話しているときに殺害の一報を受け取ったオノーリオは、メンドンサを快く思わない人たちの存在に言及しつつも、些末なことであるかのように鐘の値段を訊ねる。教会という宗教的空間においても、オノーリオには死者を悼む思いはなく俗世的利害にまみれていることを印象づける。また、自ら手を下さないところにも狡猾さが感じらよう。

とぼけた風を装ってメンドンサの死をやり過ごしたオノーリオだが、金のやり取りで関係がこじれた地元紙『ガゼッタ』のコスタ・ブリット（Costa Brito）記者や、結婚生活が破綻寸前となった時期に妻マダレーナから人殺し呼ばわりされる場面がある。ブリット記者との間では、人殺しの文言を含む誹謗中傷の記事を書かれたオノーリオが、市電から降りてくるところを待ち伏せしてブリット記者を怒鳴るだけに留まらず、「私は首筋を引っ掻き、鞭で打ってやった。大勢の人たちが押し寄せ、警官が警笛を鳴らした」（Ramos 1953: 73-74）と暴力による仕返しを試みた。そのあと警察沙汰になったが、弁護士を頼って金を介して事態を収拾している。ブリット記者やマダレーナが「人殺し」と揶揄するのは、オノーリオがメンドンサの死と関わっていることを察しているからだろう。なお、ブリット記者への暴行の件で、オノーリオ自身、「車代や心付けなど細かな経費を除いて三百ミルヘイス」（Ramos 1953: 74）掛かったと細かい点まで語っており、やはり金銭が絡むときの冷静さと問題解決のときに見せる凶暴さの二面性が垣間見える。

パウロ・オノーリオの人物像を捉えるに際し、結婚を含む女性関係にも言及しておかなければならない。家父長的な性格を持ち合わせるオノーリオにとって、女性は男性に従属するもので自立した存在ではない上、自分の価値観の中で徹底して管理する対象である。18 歳のときに起こした事件については、「三年九か月十五日間も刑務所で暮らす羽目になった」（Ramos 1953: 14）と告白する。

色気のある混血の小娘のジェルマーナを捕まえ、その尻を思い切りつねると小躍りして喜んだ。程なくして、彼女はそっぽを向いてジョアン・ファグンデスと関係を持った。馬泥棒のために名前を変えた男だ。結果、私はジェルマーナをひっぱたき、ジョアン・ファグンデスを刺した。（Ramos 1953: 14）

若気の至りとも言えるこの出来事を武勇伝のように語るところに、すでに女性への支配欲と衝動的な行動の萌芽がある。

結婚を考え始めたパウロ・オノーリオは、女は奇妙な生き物で持て余してしまうから、色恋などには興味がないと言う。それでも、裁判官を務めるマガリャンイス（Magalhães）博士の家を訪れたとき、娘のマルセラ（Marcela）と「金髪の女」として居合わせるマダレーナの容姿に目が留まる。まずは外見上で結婚相手を天秤にかけて判断しようとする。

マガリャンイス博士のところのマルセラさん。マルセラさんは肉付き良い美人だった。あ

の眼差し！（Ramos 1953: 62）

金髪の女は両手を組んで頭を傾けていた。美しい手、美しい頭。（Ramos 1953: 67）

パウロ・オノーリオがマガリャンイス博士を訪ねた目的はもともと地元選挙に関わる案件であったが、「二人を見比べた瞬間、今回の訪問の重要性が五十パーセント薄らいだ」（Ramos 1953: 64）と思わず吐露してしまう。さらに、ラフェタが指摘するように、マダレーナの描写には親しみを込めた縮小辞「頭（cabecinha）」や「手（mãozinhas）」の使用に加えて、「美しい」を繰り返すなど、オノーリオの関心がマダレーナに傾いていることが示唆されている（Lafetá 1995: 202-203）。しかし、オノーリオが結婚相手にマダレーナを選んだのは外見上の好みからではない。ルイス・ブエノ（Luís Bueno）が、「彼女（引用者注：マルセラ）は裁判官という公的権威のあるところの娘だった。パウロ・オノーリオはこの種の権威を重んじている」（Bueno 2006: 612）と述べるとおり、恩恵を受けられそうな相手に対しては計算高く振舞うのがオノーリオである。そのため、「裁判官のマガリャンイス博士のサトウキビ農園に手を出すのは遠慮した」（Ramos 1935: 43）のも当然である。一方、教員として薄給で伯母グローリアを養うマダレーナには、その弱みにつけ込むかたちでオノーリオは結婚を急ぐ。

「急がなくても。一年後とか……いろいろ準備しなくてはなりませんし」
「一年？　一年かかる取り決めなど意味がありません。何が足りないのですか。白いドレスなら二十四時間あればできます」（Ramos 1953: 93）

グローリアさん、私とあなたの姪御さんは一週間以内に一緒になります。正確に申し上げると、結婚します。もちろん、あなたもご一緒ですから。二人で食べても、三人で食べても変わりありません。それに家は広く、家具も揃っています。（Ramos 1953: 94）

ところが、農園主としても夫としても周囲の人間を自分の管理下に置く支配欲は、教育や文学に身を置くマダレーナによって揺るがされることになる。新たな時代に求められた人権意識の欠如により、慈悲深い言動を見せるマダレーナに狂気的な嫉妬を感じ、オノーリオは孤立を深めることになる。

2　20 世紀初めにおける女性の立場

『サンベルナルド』に出てくる女性の登場人物の中で、パウロ・オノーリオに一定の情けをかけられるのがマルガリーダ婆さんである。彼女の出自に関する情報は黒人だというほかには物語内にないが、1880 年代生まれと考えられるオノーリオの育ての親であることを踏まえると、奴隷生まれの乳母として貧しい生活を送ったことは想像に難くない。オノーリオはサンベルナルドの農園主となったあとも、「マルガリーダ婆さんはどこにいるのだろうか。サンベルナルドに連れて来られたらな。そろそろ百歳にでも届こうか」（Ramos 1953: 34）と、マルガリーダ婆さんのことを忘れず居場所を探し出す。そして、オノーリオは農園の労働者や神父を頼ってマルガリーダと再

会を果たした。

> 目が衰えているために頭を上げずに話し、私が子どもの頃に掛けてくれた言葉を繰り返した。老いて弱った姿に心が締め付けられ、彼女の脇に寄って筵に座った。
> 「マルガリーダ婆さん、ずいぶん探しましたよ。忘れたことなど一度もありません。会えて良かった。何か必要なものがあれば言ってもらえませんか。すぐに取りに行かせるので。マルガリーダ婆さん、遠慮しないで」（Ramos 1953: 57-58）

マルガリーダは贅沢なんてできないと躊躇いながらも、火（薪）と壺と、それから平鍋を頼む。それは乳母をしていたときに使っていたもので、盗まれてしまったのが理由である。

> 私は古い平鍋を思い出した。かつて共に暮らした小さな家で一番大切だったもの。何年もその周りで作業をし、洗い、青錆びの汚れを砂と灰で落とした。それで食い繋いだ。マリガリーダ婆さんは長い間その平鍋を使い続けた。あるいは使われたのは彼女の方か。（Ramos 1953: 58）

料理をする上で欠かせない平鍋はマルガリーダといわば一心同体であり、生きる証そのものである。パウロ・オノーリオもそのことを分かっているからこそ数十年経っても覚えているわけであり、「分かったよ、マリガリーダ婆さん。前のものと同じ平鍋を持って来るから」（Ramos 1953: 58）と優しく接する。マダレーナとの結婚後も、折に触れてマルガリーダ婆さんに会いに行っては、「こんにちは、マルガリーダ婆さん」「マルガリーダ婆さん、お元気でしょうか。お体の具合は？」「そうですか、マルガリーダ婆さん。気をつけて」（Ramos 1953: 121-122）と声を掛けて、生活に必要なものを訊ねて気遣うのであった。

しかしながら、パウロ・オノーリオは育ててもらった感謝の気持ちでさえも損得抜きには考えられず、「週に十ミルヘイスかかるが、それは子ども時分の恩義を贖うには差し支えない額だ。もう百歳近かろうか。いずれ棺を買ってあげて、礼拝堂の祭壇付近に埋葬させる日も遠からずやって来る」（Ramos 1953: 14）というように、マルガリーダが満足しているか否かは関係なく、あくまで取引きの結果として、数字を出しながら差し引きゼロにして借りを返そうとする。あとはもう彼女が死ぬのを待つかのようにも感じられ、道徳観念さえ合理性に侵されているのは明らかである。ただ、奴隷制度の時代から 20 世紀初めのブラジルを生き抜いてきた黒人女性が年金制度等の社会保障のない状況では、オノーリオのような権力者の庇護の下で死を迎えるしかなかったのも現実で、自立できる機会はなかった。

また、同じ情けをかけると言っても、マルガリーダ婆さんの場合とは異なるのがマダレーナの伯母グローリアである。彼女の出自も同じく情報が少なく、結婚していたのかどうか、子どもがいたのかどうかも不明であるが、パウロ・オノーリオと出会ったときに姪マダレーナに頼って生活していたことは分かる。いずれにしても、社会福祉制度がまともに整っていない旧共和政時代において、身寄りのない者の老後は不安定でしかない。年を取る前に蓄えた財産や家族がいない高齢女性は社会的にも経済的にも弱者の立場にあるが、グローリアの場合は姪の存在のおかげもあって、かろうじて生活できていた。

パウロ・オノーリオはマガリャンイス博士の家で一度会っていたグローリアと、電車の車内で偶然再会する。サンベルナルド農園を知らないことに幾分不愉快になるオノーリオだったが、農園の良さを語りつつ、グローリアとの会話を進める。その真の目的は、博士の家で彼女と一緒にいた金髪の女（マダレーナ）である。

「わたくしにはちょっと。町で生まれ、町で育ちましたもの。そこを離れたら、水から飛び出した魚のようになってしまうわ。ですから、州都の学校へ移れないかと努力はいたしましたのに。何かと伝手が要るようで。期待だけ持たされて……」
「すると、教師をなさっておいでで？」
「いいえ。教師は姪です」
「マガリャンイス博士の家で一緒だったあの若い女性でしょうか？」
「ええ」
「グローリアさん、姪御さんの名は？」
「マダレーナよ。それにね、あの子は成績も優秀なの」（Ramos 1953: 76）

名前を聞き出すオノーリオの会話術が巧みであるのは間違いないが、グローリアもまた自分の境遇を話しているように見せかけて姪の現状を知らせ、何らかの機会を伺っているように感じられなくもない。このあと、「ある程度の地位のある人がこんな不幸に甘んじるとは、憤りすら覚えます。学校で学ばなかった私のところの使用人でさえ、もっと稼いでいますよ」（Ramos 1953: 77）と言われ、雌鶏の飼育で稼げることを教えられるものの、学校を蔑むオノーリオの態度に対して、グローリアは「人にはそれぞれ生き方というものがありますでしょう」（Ramos 1953: 78）と違和感を覚える。結局、グローリアは姪の稼ぎに依存せざるを得ない状況にあるため、できることと言えばより良い条件を探すといった援助くらいしかない。それを察していると思われるオノーリオは、グローリアが姪をサンベルナルド農園の学校へ転任させることに関心を寄せていると受け取る。そこで、他人事を装いながら結婚について探ろうとする。

「ご存知のとおり、女にとって結婚はそのときの状況しだいですから……」
「そうかもしれません、グローリアさん。それに、健康の上からも望ましい」
「ただ、大失敗に終わる結婚も少なくありません。それに、強いて押し付けられるものでもありませんわ」
「確かに。申し込むべきものです。まったく分からないですね、グローリアさん。結婚相手を見極めるなど、誰にできると言うのでしょう？」
「わたくしの考えでは、互いの心が通い合うことが欠かせません」
「互いの心が通い合う、ですか。いささか情緒じみておりますな。夫婦の和が保たれていれば子どもも良い子に育ち、そうでなければ成長の程も知れたもの。畜産学の冊子に書いてあります」（Ramos 1953: 86-87）

結婚を考える上で夫婦の愛情を大事に思うグローリアに対して、パウロ・オノーリオはそれを「いささか情緒じみておるもの」だと切り捨て、畜産学の冊子を引き合いに出すなど話が噛み合わ

ない。それでも、マダレーナと結婚することになったとオノーリオから告げられ、3人で生活しようと誘われたときにグローリアが涙を流すのは、素直な安堵のためではないだろうか。

サンベルナルド農園で暮らし始めたグローリアの行動で興味深いのは、農園内に住み込みの帳簿係として働く70歳のヒベイロへの親近感である。オノーリオが出会ったとき、彼は「痩躯で長身、背は曲がり、目の色は濁り、頬髭をたくわえていた。ひと目で飢えている様子」(Ramos 1953: 37)だったが、若い頃は陸軍少佐様と呼ばれて住民から尊敬を集め、法律に精通し、殺人被害の遺族を保護したり、予期せぬ妊娠をした少女の子どもの代父になったりと、町では権威を持つ頼りになる存在だったようである。それでも、時代の進歩に置いて行かれてしまい、政治指導者、神父、医者、弁護士らが町に来ると、昔ながらの「陸軍少佐の叡智が霞み」(Ramos 1953: 39)、妻や子どもたちとも離散の憂き目に遭った。そして老後は低賃金で食いつなぎ、サンベルナルド農園に身を寄せているという状況である。「グローリアさんはヒベイロさんとの語らいを好んだ。(中略)ヒベイロさんはグローリアさんのことを大奥様と呼んでいた(マダレーナはただ奥様と呼ばれていた)」(Ramos 1953: 113)とあるように、グローリアとヒベイロの距離感が近いのはジェンダーの差異こそあれ、サンベルナルド農園という家父長制社会における権威のなさを共有しているからであろう。実際、オノーリオに出くわすと共に口を噤むし、「グローリアさんはいつもヒベイロさんの耳元でこそこそ秘密めいたことを語り」(Ramos 1953: 123)、「ヒベイロさんはグローリアさんのくだらない話を真面目に聞く」(Ramos 1953: 126)など、行動を揃えていることが窺える。

旧共和政時代のブラジル社会、とりわけ農園という閉鎖的な家庭内空間では権威のある男性の優位性が圧倒的であり、女性のみならず、権威を失った男性の立場まで危うい。パウロ・オノーリオは「私はかつて日雇い労働者を経験したことから、暇な時間に弱者が強者を馬鹿にするのも当然だと知っている」(Ramos 1953: 113)と言って理解を示してはいるが、自分の権威を脅かす言動は断じて許さない。それは、マダレーナの立場を見ても容易に感じられるだろう。

オノーリオの妻となるマダレーナは、教師として伯母を養いながら生計を立てているため、『サンベルナルド』の女性登場人物の中では特異な存在である。というのも「教養があり、確固とした職業を持ち、知的で、物書きであった。それは破滅や災難に導かれはしなかっただろうことを示している」(M. Silva & C. Silva 2020: 668)との評価のとおり、結婚の前後で性格面が変わらないまま、自立(独身)から従属(既婚)へと立場(身分)が移ることで、「当時のフェミニズム的な革命思想をかき立てる女性」(M. Silva & C. Silva 2020: 668)という側面が鮮明になる。

そうしたマダレーナの出発点となっているのが師範学校である。ブラジルにおける師範学校は1835年に初めてリオデジャネイロ州ニテロイ市に設置され、小説の舞台であるアラゴアス州には1864年に建てられた。マダレーナがオノーリオと結婚したのは27歳のときであり、教師生活が6年であることを明かしていることから、彼女が師範学校に通ったのは1910年代だと推定できる[6)]。ロシア革命に関する言及はオノーリオの口からしか聞かれないが、教養のあるマダレーナのことを考えるとまったく知らないとは思えない。オノーリオは結婚を申し込む前、ゴンジンとの会話の中で、マダレーナの教養に心理的な拒否反応を示していた。

「ゴンジンよ、少し前に教師のことを話してくれただろう」
「マダレーナのことですね？」

「そうだ。この間の夜に会ったが、好みの顔だ。誠実な女だろうか」
（中略）
「素晴らしい女性ですよ。『クルゼイロ紙』に載せる記事だけでも分かります」
　私は肩を落とした。
「まさか、記事を書いているのか」
「ええ、教養が豊かで。彼女とはどんな関係が？」
「さあ。ある計画を練っていたのだが、『クルゼイロ紙』への寄稿で冷めた。良識ある人だと思っていたが」
「なんと」ゴンジンが憤然とした。「そんなこと思わないでください」
（Ramos 1953: 84）

マダレーナはもともと教師をしていたが、パウロ・オノーリオはそもそも教育を不要なものと見なしているため、一目置くような権威ある職業とは認識していない。裁判官マガリャンイス博士の娘マルセラではなく、マダレーナを結婚相手に選んだ理由も自分の価値観の中で容易に管理できるとの目論見だったが、この点におけるオノーリオの見通しは甘かった。社会主義的な思想を持ち、教育を重んじる慈悲深いマダレーナの姿勢は結婚後も貫かれるからである。

マダレーナにとって、結婚とは伯母を含めた生活の保障だけだったのだろうか。ラフェタをはじめとする先行研究では、二人の結婚はパウロ･オノーリオの跡継ぎ確保のためとされるほか、「マダレーナ（限られた収入）とパウロ・オノーリオ（妻を求める）の双方にとって、利益をもたらすもの」（Lima & Lopes 2015: s/p）と指摘される。ここで、マダレーナが結婚を承諾するときの言葉を確認したい。

「あなたのお申し出はありがたいものですわ、パウロ・オノーリオさん」マダレーナは呟いた。「本当に感謝しています。でも、よく考えなくては。いずれにしても、恩義に堪えません。本当に。ご存知のとおり、わたくしはヨブのように酷く貧しい身の上ですから」（Ramos 1953: 89）

パウロ・オノーリオの求婚を「ありがたいもの」と捉えていることで、その後の生活が安泰になるとの見方もあるだろうが、マダレーナが相手の人間性に魅入ったような素振りはない。また、農園で教師をすれば報酬が上がると言うオノーリオに対し、「安定した身の上を不安定と取り替えるなんて。この辺りの私立学校ときたら、今日開校されたと思えば、明日には閉校されても……」（Ramos 1953: 87）と逡巡する様子も見せ、取引きしているようにも解せるのである。つまるところ、小説全体を通じてオノーリオの視点からしか語られないため、マダレーナの心の中は覗けないが、彼がマダレーナの愛情を感じ取ったとの描写もない以上、両者ともに打算的な結婚だったと解釈できるだろう。

3　家父長制社会の秩序を揺るがすマダレーナの行為（パフォーマンス）

グラシリアノ･ハーモスが「マダレーナをブラジルのフェミニスト運動が生み出したジェンダー

平等の闘いを体現する人物として考えていなかった」（Souza 2023: 294）ことは時代背景から明らかであるが、最終的に自殺を選ぶマダレーナの言動そのものは、主体性を持った一人の女性としての平等な社会的対話の試みと捉えられる。それが抑圧による沈黙であれ、抵抗であれ、ジュディス・バトラーの言う行為（パフォーマンス）であることを踏まえると、マダレーナは反復によってパフォーマティヴに生産されるジェンダーを体現していると理解できよう。そして、その反復的行為がジェンダー規範の単なる繰り返しに終始せず、「必然的に胚胎されている」（バトラー 2018: 293）という逸脱（ずらし）によって、パウロ・オノーリオを頂点とする家父長制社会（サンベルナルド農園）の秩序を揺るがすのである。マダレーナに教師という役割が与えられたのも偶然ではなく、「解放としての教育の力を示すため」（Souza 2023: 294）だろう。

マダレーナの抵抗はオノーリオとの結婚からわずか 2 日後に始まる。実際にはまだ抵抗と呼べるほどはっきりした行為ではなく、遠慮がちな様子が窺えるものの、オノーリオは「彼女の言葉遣いに合わせようと一週間ばかり努めてみたものの、言い間違いは避けられなかった。無意味で、軽率だった。マダレーナにはそうした些事などお構いなしであった。師範学校の人形だと思っていた。間違いだ」（Ramos 1953: 96）と早くも違和感を覚え始める。

> 夕食時、私は綿繰り機の前で機械技師と話しているマダレーナを見た。
> 「素晴らしい。まさに女というものですよ」と私は言いながらも、表に出て姿を見せぬように忠告した。「あの家僕どもは荒々しい連中です。働きたいというなら、そうですね。マリア・ダス・ドレスと働くのはどうでしょう。農作業の連中は私に任せてほしい」
> 「マリア・ダス・ドレスの仕事はどうも性に合わないのよ。それに、ここには寝に来たわけじゃないの」
> 「誰しも初めのうちは意気込むものです」（Ramos 1953: 96）

パウロ・オノーリオはマダレーナに声を掛けると、家の中で使用人マリア・ダス・ドレス（Maria das Dores）と一緒に働くよう指示するが、上記の引用のとおり、彼女は自分の意思を明確に伝えて従おうとしない。一方で、オノーリオは意に介さず、抵抗の萌芽とも気づかないのである。マダレーナが続けて相談した石切り職人カエターノ親方（mestre Caetano）の困窮した生活についても、「蓄えておくべきだったんです。どいつもこいつも先のことをまるで考えない。病気にでもなれば、報酬の前払いだの、薬だのと言い立てる。儲けが全部なくなります」（Ramos 1953: 97）とつれない返事をする。マダレーナは親方が病気や高齢であることを理由にオノーリオ対して何らかの支援をするよう乞うが、口論にまでは発展しない。ただ、マダレーナの行動はこれで終わらず、安心して死ねるくらいだから不自由な生活ではないと言う帳簿係ヒベイロの報酬にも「少ないわね」（Ramos 1953: 99）と同情して、伯母グローリアも頷くのであった。ところが、このグローリアの相槌がオノーリオの機嫌を損ねる原因となる。「身の程を弁えるがいい。くそったれが。文法の一つでも諭したことが私にあるか。でもな、私の農園に関することは心得ておいてもらわねば困る。誰かに諭されるなど、御免被る。どいつもこいつも揃いに揃って癪に障る」（Ramos 1953: 100）と初めて大声で怒鳴りつけた。それでもマダレーナはオノーリオが望む従順な女性とは相容れない行為を繰り返す。夫の与り知らないところでシルクのドレスをホーザ（Rosa）へ、服や靴をマルガリーダに贈っていたことで、ますます二人の関係は悪化するのである。マダレー

ナの貧しい者たちへの憐憫はオノーリオの感情を逆なでするだけで、彼にとっては無駄であり、浪費でしかない。しまいには、「数年前にホーザへ贈ったプレゼント（白粉、ビーズの首飾り）やマルガリーダに費やした金、僻地までの車代とゴンジンの新聞向け鉛版のことは忘れる」（Ramos 1953: 123）始末である。困った人たちまで養っていたら自分の財産が底をついてしまうかもと心配し、「ホーザにやったシルクのドレスと、マルガリーダの靴とシーツも。私に相談もせずに。こんな図々しいことがあるだろうか。これは乱用だし、横領だ。そう、紛れもない横領だ」（Ramos 1953: 125）というように、女性や妻の役割から逸脱するマダレーナの行為によって、不快な思いを募らせていく。

自分の権威が揺らぐのを感じるパウロ・オノーリオに対し、マダレーナは結婚前からの信念を貫く。とりわけ教育については、オノーリオから学校運営を任されていたパジーリャの教育方針について不満を露わにし、地球儀や地図など教材が必要だと訴える。農園では教師をしていなかったが、教師としての経験がオノーリオの支配する領域に踏み込むことを躊躇させない。なかでもオノーリオの逆鱗に触れたのが、マダレーナによって無断で購入された教材の金額である。

> 請求書が届いたとき唖然とした。六コント・ジ・ヘイスという途方もない数字。使用人の子どもたちのために、ノートやカードなどの文房具で六コントとは。考えてみてくれ。読み書き、暦、黒い表紙のプロテスタントの聖書を刑務所で学んだ男が、これほどの大金を費やすとは。それでも自分を抑えた。妻との揉め事は避けたかったし、州統領の来訪時に醜態を晒す姿を想像したからだ。いずれにしても、余計な出費だった。（Ramos 1953: 108）

パウロ・オノーリオが良しとするのは、「統計学、牧畜業、農業、簿記」（Ramos 1953: 11）といった実学に直結するものだけであるから、マダレーナの行為は彼の許容範囲を超えている。具体的な金額に言及されていることからも、当然ながら、金儲けにとって何の得にもならないどころか、大きな損であることが強調されているだろう。飽くなき富への欲望とは相容れない教育の象徴的な場所である学校空間の中でも、コロネルとして旧共和政時代の社会を具現するオノーリオと、ブラジルの近代化における教育の重要性を体現するマダレーナが衝突し、後者の信念には竹村のいう「現体制のずらし」（バトラー 2018: 293）が見え隠れする。

こうした言葉による抵抗とは対照的に、マダレーナは沈黙によっても抵抗をする。そのことで、パウロ・オノーリオの怒りは増幅すると同時に、嫉妬を覚え始めることにより、ついにはマダレーナを自殺へと追い詰めてしまう。

ある夜、二人がベッドで寝ていたとき、オノーリオが不審な物音に気づいて起き上がると「誰だ、そこにいるのは？　獣か化け物か。何も答えないのか」（Ramos 1953: 157）と言って、突然、銃を放つ。マダレーナはもちろんのこと、周辺住民まで驚く。

> 「どうしたの」マダレーナが怯えた様子で訊ねた。
> 「お前の仲間どもが家の周りをうろついている。いずれ、誰かが撃たれて倒れるだろうよ」
> マダレーナは枕を抱き締め、すすり泣いていた。
> 口笛の音が、遠くでする。何かの約束の合図か。
> 「口笛だな。この寝室で誰かと会うつもりだったか。私がいるのに？　それしかないな。出

て行って欲しいのか。それがお望みであれば、そう言えばいい。恥ずかしがることはない」
マダレーナは湧き出る泉のように涙を流していた。(Ramos 1953: 157)

ひらすら涙を流すことで疲れ果てて眠ってしまうマダレーナであるが、パウロ・オノーリオは寝たふりをしているのではないかと疑い、寝つけなくなってしまう。何度も時間を確かめたり、指を折り曲げて数字を数えたりしながら、マダレーナの様子を繰り返し確かめる。「マダレーナは寝息を立てている」(Ramos 1953: 158)、「マダレーナはまだ眠っている」(Ramos 1953: 159) というオノーリオの観察は、マダレーナの沈黙の抵抗に動揺しているからではないか。やがて、決定的な原因となる手紙が出てくる。パジーリャらとマダレーナが懇意にしていることを不審に思い始めたオノーリオは、「自分の前にあった手紙を途中まで読んだところで、なぜだか分からないが、不信の目でマダレーナを見たり」(Ramos 1953: 129)、マダレーナの様子が変わったように感じる。手紙を書いているマダレーナに近づくと、その宛名にはアゼヴェード・ゴンジンとあった。

「見せてくれないか」
マダレーナはまだ畳んでもいない便箋を掴んだ。
「見ることなんてないわ。こっちの話よ」
「そうか。でも、見せても差し支えなかろう。さあ」
「こっちの話だって、いま言ったでしょ。しつこいわね」
「それを見せなさい」彼女の肩を押さえて繰り返した。
マダレーナは両腕を伸ばして手紙を頭上高く上げ、背後に隠したりしてやり過ごそうとした。
「地獄へ行けばいいのよ。自分のことだけ心配していればいいわ」
その抵抗に激怒した。
「手紙をだせ、雌鶏如きが」
マダレーナは私の手を振り解き、「ろくでなし！」と叫ぶや、部屋へと駆け込んだ。(Ramos 1953: 144)

パウロ・オノーリオはマダレーナが何を書いているのか確認すらせず、ゴンジンと私的なやり取りをしているとの思い込みで暴言を浴びせてしまう。一方、マダレーナもまた何を書いているのかは言わずに、手紙を粉々に破いて窓の外へ投げ捨てるのである。彼女はその場を少し離れてから「人殺し！」(Ramos 1953: 145) と叫びはするものの、以前のような口論はせずに手紙の内容は明かさないままにした。その後、オノーリオは「マダレーナの誠実さは疑い得ない。手紙を見せなかったのは過ちを隠すためではなく、尊厳のためであったのだ。至極当然ではないか。馬鹿げた嫉妬だ」(Ramos 1953: 148) と、やはり自分を納得させようとするが、これもマダレーナの行為によって自らの価値観が揺らぐからであろう。結局、二人が分かり合えないのは、マダレーナの書斎の前で風に飛ばされてきた便箋の欠片を拾ったときのオノーリオの反応に表れている。

それを拾い上げて何気なく目を走らせると、マダレーナの丸みを帯びた整った字があった。率直なところ、理解できなかった。未知の言葉や見覚えのある言葉に出くわしたが、文の並

> びがやたらに入り組み、意味を捉えるのに随分と手間取らされた。よく書けたものだったのかもしれない。妻は水を得た魚のように文法に精通し、走り書きや書き込みで埋め尽くしていたからだ。しかし、正しいはずの文が何本もの線で消される箇所があり、その修正を正当化しようとしても無益に終わった。（Ramos 1953: 163）

マダレーナは手紙に何かを書き綴ることで抵抗を試みているが、教養のないパウロ・オノーリオは「丸みを帯びた美しい字」は認識できても、肝心の内容までは分からない。そのために、オノーリオは妻が浮気をしているのではないかとの疑いをますます強めていく。18 歳のときに刑務所で文字の読み書きを覚えたものの、教育を蔑ろにしたオノーリオにとっての鮮やかな皮肉である。「三度目に読んだ後、呆然としながらも分かりやすい表現に目を止め、難解な言葉の意味を探ろうとした」（Ramos 1953: 163）が、不貞行為の証拠を押さえたと確信して、ゴンジンのほか農園の労働者たちへ不信の目を向けるのである。手紙は極めて私的なものである。マダレーナの心の中を探りたいオノーリオにとって、是が非でも手に入れたいものだろう。「誰宛てなのか。また嫉妬の波が押し寄せて来た。これがまた、如何ともし難い不幸を引き起こす」（Ramos 1953: 170）と気になって仕方がなく、マダレーナを問い詰める。くしゃくしゃになった便箋の欠片を見せつけられた彼女は、何か言わないのかと問われても取り合わず、「（引用者注：手紙の）残りは書斎の、わたしの机にあります。この便箋は手紙を書いていた時に風に飛ばされたものでしょうね」（Ramos 1953: 167）と呟く。誰宛てだと執拗に迫られても、見ればわかる、の一点張りで「全てを台無しにしたのは、その嫉妬よ、パウロ」（Ramos 1953: 167）と決して声を荒げることなく、諭すように言う。そして、「じゃあね、パウロ。休むわね」（Ramos 1953: 170）と告げて、最後まで誰宛ての手紙だったかを明らかにせずにマダレーナは自殺するのであった。間もなく、オノーリオは手紙が自分宛の遺書だったことを知る。

> マダレーナの机の上には、例の封筒があった。それを開く。私に別れを告げる長い手紙であった。飛ばしながら読むと、半分ほどしか理解できなかった。自分が無知なために避けてきた難解な言葉に次々と出くわしたからである。便箋が一枚抜け落ちている。財布に入れていた、まさにあの一枚。セメントの請求書や数年前にホーザがくれたマラリア除けのお祈りと一緒に持ち歩いていた、あの一枚だった。（Ramos 1953: 173）

夫に殺されるのではなく、マダレーナが自殺を選択することで、家父長制社会の秩序は大いに揺らいだ。その証拠に、パジーリャ、ヒベイロ、そしてグローリアが農園から去り、孤独感を深めるパウロ・オノーリオがようやく半生を振り返ろうとする。自伝を書こうと決意する理由に、自分の人生の意味は何だったのだろうかという根源的な問いがあったからであろう。1920 年代から 1930 年代のブラジル北東部において、当時のジェンダー規範に縛られないマダレーナの反復的な行為は、動的かつ静的な抵抗する女性像を象徴している。

おわりに

本稿では、グラシリアノ・ハーモスの小説『サンベルナルド』を取り上げ、ブラジル北東部文

学と抵抗する女性像を考察した。旧共和政時代を生きた成り上がりの農園主パウロ・オノーリオが語る一人称形式の物語であることに留意しつつ、とりわけ教養のある理想主義的な女性マダレーナの言動について、政治哲学者ジュディス・バトラーのパフォーマティヴィティの概念を援用しながら沈黙と抵抗と意味を読み直した。家父長制社会の中で生き抜くために、マダレーナは結婚後も当時のジェンダー規範に囚われることなく、教育の重要性を体現すると共に社会的弱者への思いやりを貫いた。資本主義の暴力的なまでの支配欲によって経済的にも政治的にも成功したオノーリオに対して、従順さを求められたマダレーナは、その期待を裏切るかたちで主体性を持って社会的対話を試みたのである。その反復的行為を通じて、従来のジェンダー規範が単に再生産されるのではなく、「必然的に胚胎されている」（バトラー 2018: 293）逸脱によって揺らいだことは、徐々に冷静さを失い、嫉妬と葛藤に駆られるオノーリオの狂気的な様子に如実に表れていた。彼の中に芽生えた殺意を逆手に取るようなマダレーナの「人殺し！」（Ramos 1953: 145）という罵りは先手を打つものであり、悲劇的ではあるが自殺による沈黙と不在の抵抗を通じて、死を半永久的なものへと変え、オノーリオに自伝を書く決意をさせるに至った。

マダレーナの生き方については、先行研究にあるとおり、ブラジル社会におけるフェミニズム運動を先取りするものだと読み取れるものの、時代背景を考慮すれば、マダレーナにジェンダー平等の闘争が託されていたとすることには注意しなければならない。とはいえ、旧態依然とした男性中心的な社会における彼女の行為は、構築されるものとしてのジェンダーによって規範をずらすことにつながる。『サンベルナルド』を資本主義批判の小説とだけ捉えていては見えてこないものが、マダレーナに象徴される抵抗する女性像にある。

語り手であるパウロ・オノーリオがマダレーナの突然の死を受け止め切れず、彼女の不在に苛まれつつ自分自身の半生の意味を言語化しようとするこの小説の構造は、家父長としての権力が絶対的ではないことを示唆するものではないだろうか。マダレーナの声なき声は、オノーリオの生の世界を死の世界という外部から揺るがし続けているのである。

本稿で焦点を当てたマダレーナはブラジル北東部地方に生きた女性であるが、その言動には普遍的な要素も含まれていることで、小説の発表から 90 年を経てもなお人口に膾炙している。当然ながら、彼女は抵抗する女性像の一つの例であり、ハーモス文学のそのほかの作品をはじめ、ローカルな文脈で生み出された北東部文学における女性像についてもさらなる分析が必要である。この点に関しては今後の課題としたい。

注

1）グラシリアノ・ハーモス・ジ・オリヴェイラ（Graciliano Ramos de Oliveira）は、1892 年にアラゴアス州ケブラングロ市に生まれた。1928 年から 1930 年にかけて同州パルメイラ・ドス・インディオス市長を務めたあと、1933 年に小説『カエテー族（*Caetés*）』で作家デビューを果たす。1936 年には共産主義者の嫌疑で逮捕されるが、そのときの経験は死後となる 1953 年 9 月刊行の回想録『獄中記（*Memórias do Cárcere*）』に綴られている。1952 年には東欧の社会主義国を歴訪し、翌 1953 年 3 月に肺がんにより死去した。ブラジル文学を代表する作家の一人であり、特に、パライーバ州生まれのジョゼー・リンス・ド・ヘーゴ（José Lins do Rego: 1901-1957）、セアラー州生まれのハケウ・ジ・ケイロス（Rachel de Queiroz: 1910-2003）、バイーア州生まれのジョルジェ・

アマード（Jorge Amado: 1912-2001）らと共に、北東部地方主義作家として知られている。

2）ブラジル北東部における旱魃避難民（retirante）の一家を襲う貧困や飢餓、社会格差などを扱う。2022 年に水声社から邦訳（高橋都彦訳）が出版されている。

3）小説『サンベルナルド』からの引用（日本語訳）は、フェリッペ・モッタ講師（京都外国語大学）との共訳に基づいている。ただし、2026 年 3 月に刊行予定の『サンベルナルド』（春風社）とは、一部訳文が異なる。

4）コロネルによる政治体制を意味するコロネリズモ（Coronelismo）では、中央政府の方針を支持する見返りとして、コロネルが地方政治を自由に牛耳っていた。政治指導者への投票を選挙民（成人男性）に対して強制することから、「家畜の端綱投票（voto de cabresto）」と呼ばれ、重要な役割を果たしていた。

5）たとえば、サンベルナルド農園の労働者カジミーロ・ロペスについて、パウロ・オノーリオは「気に入っている。犬の嗅覚と犬の忠誠心を持つ勇敢な奴で、縄さばきが上手く、追跡もお手のものだ」（Ramos 1953: 16）と評する場面がある。

6）1920 年代の後半と思われる『サンベルナルド』の第 15 章において、結婚の意思を伝えようとするパウロ・オノーリオが 45 歳、マダレーナが 27 歳となっている。

参考文献

竹村和子
2024　『フェミニズム』、岩波書店

バトラー、ジュディス
2018　『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社

Andrioli, Fábia Luiza de Oliveira. & Cintra, Erica Piovam de Ulhôa
2024　Escola normal e institutos de educação: formação e memória de mulheres na história do magistério no Brasil. *Ciências Humanas*. v. 29. ed. 140.

Araújo, Raimunda Célia Costa Teixeira & Silva, Olívia Aparecida
2023　Um estudo da emblemática Madalena em São Bernardo, de Graciliano Ramos. v. 10 n. 1: 55-67.

Bueno, Luís
2006　*Uma história do romance de 30*. USP; UNICAMP, São Paulo; Campinas.

Dacanal, José Hildebrando
2018 *O romance de 30*. 4ª ed., BesouroBox, Porto Alegre.

Fabrício, Claudiane Oliveira Pimentel
2019 História da escola normal em Alagoas: por onde caminhamos e aonde chegamos? Dissertação de Mestrado. Universidade Federal de Alagoas.

Lafetá, João Luiz.
1995 O mundo à revelia. *S. Bernardo*. 5ª ed., José Olympio, Rio de Janeiro: 192-217.

Lima, Wellerson Batista de & Lopes, Larissa Cristina Viana
2015 O mito feminino em São Bernardo: a insubmissa Madalena. *Anais XI CONAGES*. Realize Editora, Campina Grande.

Ramos, Graciliano
1982 *Cartas*. Record, Rio de Janeiro.

Ramos, Graciliano
1953 *S. Bernardo*. 5ª ed., José Olympio, Rio de Janeiro.

Schwarcz, Lilia Moritz
2019 *Sobre o autoritarismo brasileiro*. Companhia das Letras, São Paulo.

Silva, Maria Claudicélia Curvêlo da & Silva, Cristiano Cezar Gomes da
2020 Vidas caladas: a voz feminina na obra São Bernardo de Graciliano Ramos. *Diversitas Journal*. v. 5, n. 1: 660-679.

Souza, Letícia Oliveira de
2023 O retrato da insubmissão feminina através da personagem Madalena na obra “São Bernardo” de Graciliano Ramos. *Revista Debates Insubmissos*. v. 7, n. 21: 280-296.

Stegagno-Picchio, Luciana.
2004 *História da literatura brasileira*. 2ª ed., Nova Aguilar, Rio de Janeiro.

ISSN 2759-0542

BOLETÍN del

Centro de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Centro de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2025

‹ARTÍCULOS›

La expansión y integracion territorial de los mexicas en el Istmo de Tehuantepec
..... Munehiro KOBAYASHI 1

A literatura nordestina do Brasil e a figura feminina resistente: através do romance *São Bernardo*, de Graciliano Ramos
..... Masayuki KIBE 23

‹ESTUDIOS PRELIMINARES›

Presentación de literatura relacionada con las relaciones interamericanas en torno a la Doctrina Monroe en el Japón de la preguerra
— De la Doctrina Monroe al Panamericanismo —
..... Toyoharu TSUJI 43

Los museos comunitarios y la política museística en Centroamérica: comparación de los casos de Nicaragua y Costa Rica
..... Asuka SUGIOKA 59

‹NOTAS DE INVESTIGACIÓN›

Daños al Patrimonio Arqueológico y su Tratamiento Sancionador: análisis del DS N°005-2019-MC
..... Hironori OTANI / José Antonio ONOFRE MAYTA 77

‹RESEÑA DE LIBROS›

American Empire: A Global History, por Anthony Gerald Hopkins (Kan Hideki, Mori Takeo, Nakajima Hiroo y Kami Hideaki tr.)
..... Takashi USHIJIMA 101

Vol. 25